

## 基礎 FS 歴史と教育を学ぶカンボジア 2025

### 事後報告レポート

人間科学部 社会福祉学科

須山結寿花

私は、今回 FS（フィールド・スタディーズ）でカンボジアを選んだのは、将来東南アジアなどのまだまだ伸び代がある地域への海外支援をする仕事に就きたいからです。小さい頃から、募金活動やアフリカ地帯にたくさんの服やランドセルなどを寄付したりしてきて、生きていく中で貧しくて困っている人の助けになることをしたいという意思がずっとあり、この機に現地に行って自分でその地を感じてみたいと思いました。

FS で学んだことは、カンボジアの歴史にはすごく残酷な出来事もあり、地雷博物館やキングフィールドを訪れた際は複雑な心境になりましたが、現時点でのカンボジアは、すごく明るく、現地の方々もフレンドリーで、自然と自分が笑顔になってしまうそんな国だなというのを感じました。その中で特に記憶に残っていることは、FLO の孤児院に行ったことです。「孤児院」という名前を聞くとやはりどこかで、どんな生活をしているのだろう、みんな落ち込まず楽しく暮らしているのだろうかと考えてしまうのですが、行ったらその考えはなくなりました。すごく小さい 4 歳の子から高校生の子たちまで幅広くいて、みんな元気でした。最初は隣に座っていた男の子がバスケットをしようと誘ってくれて、子どもたちが率先してボールを拾い楽しんでいると、私たちにボールを渡してきて「やってみて」と、一緒に楽しみたいという思いがすごく伝わってきて心配りがすごいなと感動しました。縄跳びでも二重跳びを見せたら、自分ごとのように「すごい！」と喜んでくれて思わず笑ってしまうほど嬉しくなりました。他の孤児院はわかりませんが、FLO は毎日のルーティーンが非常に整っていると感じました。日本の子どもたちでさえ、自分優先になってしまうのが当たり前なのに、ご飯の時間になったらスプーンを持って綺麗に一列に並び、遊んでいる時に音を鳴らすとすぐにやめる。まだ小さいのに「こうしなといけない」というのがわかっている姿に驚きました。

夜ご飯を食べた後、私は 1 人の女の子と仲良くなりました。その子はベンチに 1 人で座っていて、「なんでここにいるの？」と聞くと、「私はわいわい遊ぶよりもゆっくり 1 人で何かをするのが好き」と言っていて、どこか私と似ているなと思いました。そして一緒に会話を楽しんだのですが、私はそこまで英語が得意なわけでもないのに、なぜか全てが通じ合って 2 時間くらいずっと喋り続けていたのを覚えています。恋愛話、生活話、家族のこと、将来のこと、全部隠さず話してくれました。一番悲しかったのは、日本にすごく興味があると言ってくれたので「ぜひ来て！」と伝えたとき、「I have no money...」と言われたことです。お金に余裕がない人からすると、こういうことで楽しみが一瞬にして消えてしまうんだと、

そこで実感しました。とても心が締め付けられたと同時に、この子達がもっと笑顔で、いろんな場所に行けるような繋をしたと思いました。帰りの別れでは、自然と涙が溢れ込んでしまいました。日本でさえ何千人いるの中から自分に合う友達を見つけるのは難しいのに、普段絶対に関わる事のない異国の同年代の子と、包み隠さずに話で盛り上がったことが何より嬉しかったです。またみんなに会いに行きたいです。

まだまだ経済的には課題も多いし貧しい人も多いけれど、日本と違うなと思ったところは、みんな生き生きしているところや、人ごとのように考える人が誰一人いないことです。日本にはあまりない光景だからこそ、より惹かれ日本より好きな部分でした。こういうところで私も生きて、今まで悩んでいたことや不満はちっぽけに見えて、生きることの価値観も 180° 変わるんだらうな、と思いました。

FSに参加していた皆も言っていたけれど、カンボジアはあまり旅行で行こうとはならないし、どんな国かあまりわからないから行くのを躊躇ってしまうのが正直なところだったので、今回FSで行けて本当に良かったと思っています。それまでの自分の価値観の幅をより広げてくれた国でもあったし、将来のことをより一歩前に進めてくれるきっかけにもなりました。異国の地で出会った人と繋がりが持てたことも含めて、すべてが貴重な経験でした。何年後かには、カンボジアでも外部からの助けを補っている存在になっていたらいいなと思います。

## 基礎 FS 歴史と教育を学ぶカンボジア 2025

### 事後報告レポート

グローバル学部

グローバルコミュニケーション学科

鈴木汐乃音

私は今回のフィールドスタディーズで初めてカンボジアを訪れました。もともと行き先は海外を希望しており、その中でも、まだ訪れたことがない国を選びたいと考えていました。その中で特にカンボジアに強い興味を抱いたのは、歴史や文化を知りたい気持ちに加え、プログラム内容に学校訪問や子どもたちとの交流が含まれていたからです。私は子どもと関わるのが大好きで、将来的にいつか教育や子どもと関わる仕事に携わってみたいと考えているため、この FS は自分のやりたいことができる思い参加しました。

一週間の滞在は、普段の旅行とはまったく異なるものでした。毎日が初めての経験で、印象に残る出来事ばかりでした。特に大学や小学校、孤児院への訪問は、このプログラムならではの体験であり、とても印象に残っています。最初に訪れたプノンペン王立大学では、現地の大学生たちとグループに分かれ、交流を行いました。その中で特に印象的だったのは、日本語がとても上手な学生と出会ったことです。私も今英語と中国語と韓国語を勉強しているため、自分も頑張ろうという良い刺激となりました。

小学校での訪問もとても良い思い出です。折り紙や習字のやり方を子どもたちに教える際、私は子どもたちに通じる簡単な英語しか使えず、最初は不安を感じましたが、子どもたちは真剣に聞いてくれて、無事に作ることができて安心しました。特にかぶとや鶴を作ったときに子どもたちがとても喜んでくれ、すごくうれしかったです。また、みんなの前で踊ったソーラン節はすごく久しぶりだったので、楽しかったのですが、踊った後に体が痛くなり、数日間筋肉痛が続きました。帰るときに担当していた子どもたちが「また会いたい」と集まってきてくれたのが、とても可愛かったです。

さらに、孤児院の FLO (Future Light Organization) で過ごした時間は、この旅で一番の思い出、経験のひとつです。想像していたよりも小さな子どもが多く、最初から人懐っこくて驚きました。私は特に一人の女の子と多くの時間を過ごし、いろいろな遊びをしました。日本でいうアルプス一万尺のカンボジアバージョンの遊びを教えてもらったり、カンボジアの歌を一緒に歌ったりする中で、言葉を越えた交流の楽しさを実感しました。また、同年代くらいの子供たちとは英語で会話を交わしました。彼らは英語がとても得意で、私が理解できるように簡単な言葉で話してくれたため、スムーズにコミュニケーションをとることができました。夕食で一緒にカレーを食べ、夜遅くまで遊んだことは特別な思い出です。歩くたびに子どもたちから折り紙の作品をもらい、家には 20 個近くの作品

があります。インスタグラムを交換した子どもたちとも現在も時々連絡を取り合っており、交流が続けられています。

このFSでは、カンボジアの文化や歴史についても多くを学びました。特にキリングフィールド（1970年代のカンボジアで、ポル・ポト政権による大量虐殺が行われた場所の跡地）の訪問は強い衝撃を受けました。キリングフィールドという存在自体を今回の旅で初めて知り、実際に現場を見て、想像をはるかに超える残酷さに驚きました。木に打ち付けて殺害する方法や、池の中にまだ遺体が存在しているという現実、展示されていた写真が現実にあったと信じられないくらいの残酷さでした。この経験を通じて、歴史を学ぶことの大切さを改めて感じました。

他にも、カンボジアの食事はどれも美味しかったです。私は海鮮が大好きなので毎日食べることができてむしろ幸せでした。特に屋台料理の小さなエビがおいしかったです。また、買い物も大きな楽しみのひとつで、毎日のように服やブレスレットなどを購入しました。ブレスレットは合計6個買いました。特にナイトマーケットでは、値段交渉が楽しかったです。最後まで粘り強く交渉し、ほとんど半額以下まで値引きしてもらえたことは、現地ならではの体験であり、楽しかったです。また一見怖く見えるカンボジア人もみんな優しくてぐいぐい行くことができました。

この一週間は、ただ楽しかっただけでなく、自分の価値観や考え方が大きく変わりました。日本人での友達との絆が深まっただけでなく、現地の人々や子どもたちとの出会いを通じて、たくさん交流することができました。今回のFSを通じて得られた学びと経験は、今後の自分の人生にとって大きな経験になると思います。

私はこのプログラムに参加してカンボジアに行くことができ本当に良かったと思います。これからも今回の経験を活かし、他者との交流を大切にしていきたいと考えています。

## 基礎 FS 歴史と教育を学ぶカンボジア

### 事後学習レポート

教育学部 教育学科

高井遥菜

私は今回、フィールド・スタディーズの「カンボジア 歴史と教育を学ぶ」に参加し、戦争博物館や地雷博物館、学校や孤児院、そしてカンボジアの観光地に行き、多くのことを学んだ。その中でも特に印象に残っているのは、トンレサップ湖訪問、中学校訪問、FLO (Future Light Organization) での交流だ。

まず、トンレサップ湖訪問では現地の方がオールで漕いでくれる小さな船に乗り、マングローブの中を進んだ。このような経験は人生で初めてであり、特に印象に残っている。そこで、「なぜ湖の上で暮らしているのか」と尋ねてみると、「生まれ育った故郷だから」「ずっとここにいるため不便だとは思わない」と話してくれた。私は「このような場所で暮らすのは大変だろう」という固定観念を抱いていたが、その考えは自分の一方的な見方であることに気づかされた。

中学校訪問では、日本とカンボジアの教育環境の違いを直接感じ取ることができた。教室は外に近い造りで、照明は少なく、エアコンはなかった。生徒は制服のような服を着ていたが、一人一人異なっていた。十分な教育環境とは言えない状況ではあったが、生徒は明るく生き生きとしていた。教育環境が整っていなくても「学びたい」という気持ちが教育の根本であることを改めて実感した。

FLO では、小さな子どもから私たちと同じくらいの年齢の子まで幅広い年齢の子どもたちが暮らしていた。子どもたちと交流する前に、あらゆる理由で親と一緒に暮らせない子どもたちが集まって FLO で生活していると聞いていたため、重い雰囲気想像していたが、実際子どもたちは明るく人懐っこく、そして賢かった。小さな子どもでも英語が話せていた。英語ができないと教材が英語のため、勉強をすることが難しく将来仕事に就いたときに苦勞してしまうということだった。将来に必要な教育を受けられていることを知った。交流の中で、私は 13 歳の女の子とたくさん話した。彼女は 5 歳のころから FLO で生活しており、将来は医者になることが夢だと言っていた。どうしてか聞くと「世界にはたくさんの方がいて、その人たちみんなを治したいから」と答えてくれた。その言葉を聞いて私は思わず涙が出た。私よりもはるかに厳しい環境で生きてきた彼女が、自分のことだけでなく世界の人々の幸せを考えている姿に、強さと頼もしさを感じた。FLO で暮らす子どもたちはみんな、本当の家族のようで前向きに生きている姿がとても印象的だった。

今回のフィールド・スタディーズを通して、初めての海外だったこともあり人生で初めてというようなことばかりだった。そして、カンボジアの歴史や文化、教育の在り方、子どもたちの強さを実感することができた。これらは私にとって本当に大きな経験だった。将来、小学校教員となり子どもの可能性を広げられる教員になりたいと強く思った。

## カンボジアFSを通して

アントレプレナーシップ学部

木津 葉琉薫

今回のカンボジア研修を通して、私はまさに五感でカンボジアという国を感じる事ができました。私が『カンボジアの歴史と教育』というFSを選んだ理由は、カンボジアという国に前々から興味があったことに加え、子供が好きで、昔の夢が発展途上国で教師になることだったからです。現在の私は教育関係の法人をかけ持ちし、「誰かを幸せにする特別な存在になる」という目標を胸に、アントレプレナーシップ学部で学んでいます。そんな私にとって、このFSはとても魅力的で、研修前から強い期待と少しの不安を抱いていました。実際に参加してみると、それは私が想像していた以上の学びと気づきに満ちた時間であり、人生の中でも特別な経験となりました。

研修初日は、これから何が起こるのかという不安と、初めての国で初めて出会う仲間たちへの好奇心が入り交じり、なんだか落ち着かない気持ちでいっぱいでした。空港に降り立った瞬間、湿度の高い独特の空気と、街の雑多な匂い、賑やかなマーケットの音がいっせいに押し寄せ、「ああ、本当にカンボジアに来たんだ」と実感しました。街の景色は日本と比べると整っているとは言えないかもしれませんが、そこには人々の生活の息づかいがあり、活気と温かさを強く感じました。

トゥールスレン博物館やキリングフィールドの訪問は、間違いなく私の人生において忘れられない経験になりました。教科書で学んだ「ポル・ポト政権の大虐殺」は、文字としては知っていましたが、その場所に立ち、当時と変わらない建物や展示物を目の前にすると、知識が現実になり、体が震えるような感覚に襲われました。展示されていた写真の数々や拷問器具、そして床に残る血痕は、決

して過去の話ではなく、ほんの数十年前に起こった現実だという事実を突きつけてきます。あまりの残酷さに目を背けたくなる瞬間もありましたが、「見たくない」と思う自分に気づくたびに、「ここに来ることができた自分には、ここで感じた痛みを伝える使命がある」と思い直しました。忘れたいと思うほどに辛い経験でしたが、同時に「忘れてはいけない」と深く心に刻むことができました。もし私が日本で安全に育ち、教育を受けられることを当然と思っていたら、ここまで深く考えることはなかったかもしれません。改めて、平和や教育の尊さを噛みしめる時間となりました。

プノンペン王立大学への訪問も非常に印象に残っています。現地の学生たちは、母国をより良くしたいという強い意志と向上心を持って学んでおり、私も刺激を受けました。彼らは日本語や英語でカンボジアの言葉や自分たちの夢について語ってくれましたが、その瞳はとても輝いていて、自分のためだけでなく、家族や国のために学んでいる姿に胸を打たれました。日本では「大学に行くのは当たり前」と思ってしまいがちですが、カンボジアでは学べること自体が特権であり、そこに感謝していることが強く伝わりました。私自身も、ただ学ぶだけではなく、学んだことをどう社会に還元するかをもっと考えなければならないと感じました。

ナイトマーケットでは、異国の文化を存分に楽しみました。屋台の匂い、賑やかな音楽、色鮮やかな布や雑貨に心が躍り、まるでテーマパークのようにワクワクしました。輸入品が多いことに少し驚きましたが、カンボジアの人々の手で作られたハンドメイド製品を選んで購入しました。お店の人は「カンボジア製は高いからあまり外国人が買わない」と言っていましたが、私は少しでも現地の経済に貢献したいという気持ちもあり、手編みのバッグや手作りのブレスレットなどを買って帰りました。日本では大量生産の安い製品に慣れていますが、ひとつひとつ心を込めて作られた品には温かみがあり、持ち帰った今も大切に使っています。

食事については、最初は「大丈夫かな」と不安でしたが、日を追

うごとに挑戦する気持ちが芽生え、気づけばカエル料理を3回も食べていました。思ったよりも淡泊で、鶏肉に似た味で美味しかったです。サソリやタランチュラなど、日本ではなかなか食べられない食材にも挑戦しましたが、意外と癖はなく、子供たちが「おやつだよ」と笑って教えてくれた姿がとても可愛らしかったです。食文化は驚きの連続でしたが、挑戦してみることで「案外住めば都」という言葉の意味がよく分かりました。

特に心に残っているのは、孤児院や小学校で出会った子供たちとの交流です。最初は少し恥ずかしそうにしていた子供たちも、すぐに笑顔を見せてくれるようになり、一緒に遊んだり、歌を歌ったりして過ごしました。別れ際には本当に離れがたく、仲良くなった子に髪飾りやブレスレットをプレゼントしました。彼らがとても喜んでくれた姿が嬉しかったと同時に、「私の方が君たちに会えて何倍も嬉しいんだよ」と伝えられなかったのが少し心残りです。それでも、あの子たちがそれを見るたびに少しでもこの日の思い出を思い出してくれたらいいなと思います。

今回の研修は、ただの旅行ではなく、自分の価値観を揺さぶり、未来の生き方を考えさせてくれる貴重な時間でした。遊びの要素もありましたが、それ以上に学びが多く、自分の視野が大きく広がったと感じています。教育に関わる者として、そして一人の人間として、これから何を大切に生きていくべきかを考えるきっかけとなりました。

最後に、コーディネーターのラッシーさんへ。私たちに同行してくださり、本当にありがとうございました。歴史の解説や現地の文化についてのお話はとても学びになりましたし、時にはジョークを交えて笑わせてくださり、緊張が和らぎました。誰に対しても分け隔てなく接し、常に私たちを気にかけてくださった姿がとても印象的で、頭が上がりません。おかげで安心して研修期間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。